

W33a **ぎんが衛星搭載全天モニター装置 (Ginga/ASM) による X 線新星の探索**

北本俊二 (立教大学)

X 線放射天体の多くは、いろいろな時間スケールで強度やエネルギースペクトルを変化させる。その変化を調べることで、X 線放射天体の物理現象を知ることができる。また、X 線新星も度々現れる。X 線新星は光度が大きく変わるので、光度とエネルギースペクトルの変化の相関等を観測するためには都合が良く、放射機構の研究に重要な情報をもたらす。すでに半世紀近く X 線天体の強度やエネルギースペクトルをモニターしたデータが蓄積されてきた。ぎんが衛星に搭載されている全天モニター装置 (All Sky Monitor(Ginga/ASM)) は、1987 年 2 月から 1991 年 11 月まで、およそ 4 年半の間、X 線で全天をモニターした。この間の大部分は、X 線で全天モニター観測を行っているのは Ginga/ASM 唯一であった。Ginga/ASM で観測した既知の天体の光度曲線はデータベースとしてすでに公開されているが、データベースに無い天体の光度曲線の作成をはじめとする解析ツールはなかった。そこで、現在、Ginga/ASM のテレメータデータに立ち戻って、天空の座標を与えて、その座標からの X 線の活動を調べる解析ツールの開発を進めている。今回、MAXI で発見されたいくつかの X 線新星の 1987 年 2 月から 1991 年 11 月の間の活動の探索を行った。そのうち、大質量 X 線連星系のパルサーである V0332+53 が 1989 年 9 月に、BH 候補星である MAXIJ1728-360 が 1990 年 3 月に増光の兆候を示していることを確認した。その他の結果を含めて報告する。